

## 「近代の歴史地理・再考」がもたらした成果と課題

山根 拓・三木 理史

本稿は、シンポジウム当日の報告・コメント・議論を振り返り、シンポジウムオーガナイザー2名が率直に思いを記したものである。本特集号において、こうした話題を総合討論の部で取り上げるのではなく、「後記」として最後に別記する理由は、シンポジウム当日の議論は客観的な事実として収録したうえで、それから一定の期間を経た現時点でのシンポジウム全体の評価をわれわれが示しておきたいと考えたためである。

シンポジウムをお聞きになった方々は、近代の歴史地理(学)にもさまざまな研究領域・視角があるのだということを認識されたであろう。シンポジウムを実施するための準備段階で、その報告者・コメンテーターとしては、従来何らかの形で「近代歴史地理学」やそこで取り上げられている主要なテーマに関わった経験を有する方々に、お願いすることにした。中には、こちらが勝手に「〇〇地理学者」などという肩書を用いたがために、違和感を覚えられた報告者もおられた。

とはいえ、今回の報告者およびコメンテーターはいずれも現在学界の第一線で活躍されている方々であったため、シンポジウム全体で多岐にわたる充実した報告が得られた点は特筆すべきであろう。各報告やコメントの詳細はすでに示されており、ここでは詳述しないが、ここ20~30年における斯分野の研究史や複数の課題・アプローチの存在や作法を、ある程度俯瞰的に見て確認できたのではないかと思う。歴史地理学・人文地理学の領域に

とどまらず、経済史学のような隣接分野から報告者を得て、その立場から我々に向けられるまなざしについても知ることができた。また、若手研究者からは、空間的概念としての近代modernあるいは近代性modernityの検討が提起された。すなわち、今回は非常に包括的で総合的な内容のシンポジウムを開催することができたと言えよう。

ただ一方で、今回の全報告等を以て、現在の近代歴史地理学の諸領域がすべてカバーし尽くされたとは到底考えられない。例えば、歴史GIS(地理情報システム)研究の存在や意義については、今回ほとんど言及できなかった。ここ20年の地理学にとって、GIS研究の進展と普及は、単に主題図作成やプレゼンテーションの有用なツールとしてその方法を変えたに止まらず、地理学の研究方法自体に見直しを迫るほどの大きな影響を及ぼす重要な変革であったと言える。歴史地理学に関して言えば、この分野が長らく研究主題としてきた「過去の景観(空間)の復原」を進める上で、GIS研究により、多様な歴史地理情報を包摂した可視的で具体的な空間イメージの構築が可能となった。我々が従来行ってきた歴史的地域景観に関わる主題図作成過程が容易化されたことはもちろんであるが、それだけではなく、歴史GISは、従来の我々が処理し得なかった近世・近代の絵図・地図資料を用いた2次元の景観・空間復原はもとより、過去の場所の景観イメージの3次元的復原描写も可能にした<sup>1)</sup>。

歴史GIS以外にも、文化論的転回cultural turn以降の「新しい」文化・社会地理学の流れを受けた近代歴史地理学の主要な成果である近代都市誌研究の動向も、今回のシンポジウムで重点的に取り上げられるべき対象であったように思われる。さらに、歴史地理学の理論に関わる考察も不十分であったし、その他にも、シンポジウムでカバーしきれなかった領域が種々あったのかもしれない。

また、シンポジウムの進行にも問題が残った。最後の討論部分において、十分な時間を確保できなかった上、フロアからの質問に対する報告者・コメンテーターの回答を得ることに時間を費やした結果、3名のコメンテーターによる質問への報告者の回答を引き出す時間がなかった。そのため、この特集号では、コメントに関する各報告者の回答を事後的にお願いし、それらを掲載することによって不足部分を補った（本号「全体討論」後半部分）。とはいえ、シンポジウム当日の不幸は消えるわけではなく、オーガナイザー兼進行役としての責任を感じ、深く反省している。

わが国の近代歴史地理学研究の動向については、上記のようにシンポジウムの中で詳細に報告されたが、ここで比較のために、近年の欧米歴史地理学の動向に関するHeffernan<sup>2)</sup>の整理を参照したい。それによれば、1960・1970年代の人文地理学における空間科学の普及が既存の伝統的な歴史地理学の再考を促し、それ以降、歴史地理学研究には新たな複数の立場が現れたという。すなわち、大別すると、空間科学を受容した①計量的歴史地理学≒歴史地理情報科学、それを批判的にみた②社会経済史的・唯物論的歴史地理学と③人文主義地理学≒新文化地理学である。そして、1980年代以降これまで、①～③の各歴史地理学研究は、個別に存在しつつも常に関わり合い、相互に効果的に同化してきたというのが、Heffernanの見立てである。そうした

折衷・混淆により「文化歴史地理学」が生まれ、中でも20世紀末以降は「帝国主義と植民地主義」研究の重要性が増してきたという。また、学際化に伴い、歴史地理学の独自性に疑義が呈される傾向も表出したことも指摘されている。さらに重要な指摘として「その主題の多様化にも関わらず、21世紀の歴史地理学はますます（相対的に）近過去に焦点化されるようになってきた」というものがある。

このような欧米歴史地理学の動向に比して、わが国の近代歴史地理学をどのように位置づけることができるだろうか。Heffernanによる最後の指摘すなわち歴史地理学における近現代への焦点化は、欧米とわが国において共通する傾向といえよう。研究の蓄積量という点では、わが国における近代歴史地理学は、研究者層の薄さもあって欧米の同分野に比べて小規模ではあるが、本シンポジウムでの各報告をみれば、欧米の動向と無縁ではなく、上記①～③に伝統的歴史地理学も含めた四つの立場が併存するのが現状との印象が筆者らにはある。それらが折衷的な歴史地理学研究を形作っているかどうかは不確かであるが。

研究者が依拠するこうした哲学的・方法論的立場の相違とは別に、1980年代以降の日本の近代歴史地理学の展開過程には、種々の「再考・再検討」=研究視角や基礎概念の再定位や従来顧みられなかった領域や史料への注目と接近が見られた。具体的にいえば、より同時代的に、そして従来とは別の立ち位置から見える歴史地理的な事実を解釈的に提示する研究スタイルが想起される。権力が編んだ「正史authentic history」から外れ、あるいはその陰に隠れた／隠蔽されたオルタナティブな歴史的事実に基づき同時代的空間を再解釈し、新たな歴史地誌を提示する試みである。また、「近代」、「モダニティ（近代性）」や「近代日本」といった、言わば斯学の前提的・基礎的な概念を再検証するような

試みもある。植民地歴史地誌研究もまた、わが国でも取り組まれるようになってきた。客観性や正確性の面から難があるとしてか、近代史資料としては従来あまり注目されてこなかった図像資料（民間地図や鳥瞰図、絵画等）やマスメディア（新聞、雑誌等）を、地域の同時代的な把握や理解のために、むしろ積極的に評価して読み解いて利用する動きも現れてきた。上述した歴史GISの導入もまた新たな動きの一端をなすものである。本シンポジウムの報告の中でも、大城報告や米家報告、関戸報告等は、こうした新しい研究スタイルに関わるものであろう。さらに国内の研究ではないが、山根が討論の最後に触れた“Journal of Historical Geography”（2010, 36-3）の特集‘Counterfactual Historical Geographies’（反実仮想の歴史地理）<sup>3)</sup>における諸論考にみられるような、過去の時代に遡り同時代的状況下での種々の偶発的な空間形成の可能性やその社会的影響を追究する研究も、近代歴史地理学における新しい研究領域の開拓の可能性を感じさせる。

このような新たな研究動向は、もう少し相互に批判を重ね合って成熟してゆくことが望ましいが、現段階においても近代歴史地理学の内容の多様化と充実には十分に寄与している。ただし、こうした学問内容の多様化は学際化ともむすびついており、それが進めば近代歴史地理学というサブディシプリンがアイデンティティの危機を迎え、解体される可能性もある。単に古い暖簾や看板を守り抜くことに意味があるというわけではないが、近代歴史地理学という漸く成長して興味深さを増してきた、この共通のフィールド・議論の場を、我々としては今後も維持し発展させたいと考える。しかし、学際化がますます進む学問の世界において、他領域との学際的交流を断ち「鎖国」することによってごんまりとこの分野を守るという選択肢はない。とすると、我々が採るべき道は、近代歴史地理学と

いう名の下で行われる個々の研究活動が一定程度共有できるようなプラットフォームが何かを常に意識し、お互いに批判的に確認し、それに基づいて当該分野の諸研究が積み重ねられた先にある筈の斯学の共通目標を見定めてゆく方向にあると思われる。端的にいえば、それは「近代歴史地理学は何を目指すか？」と問うことであろう。例えば、旧来のものへの回帰とは異なる「新しい歴史地誌の構築・再構築」が、斯学の当面の目標になるのではなからうか。

「近代の歴史地理・再考」の成果を吟味し継承した近代歴史地理学的研究が今後進展し、新たな驚くべき成果がもたらされるかも知れない、次の「近代の歴史地理・再々考」の機会が楽しみである。

#### 〔謝辞〕

シンポジウムに直接携わっていただいた報告者・コメンテーター諸氏、ならびにシンポジウム会場校として会場の提供はもちろん種々の難しい用務に従事してくださった山口大学の貞方昇・荒木一視の先生方、その他、長丁場のシンポジウムにお付き合いいただいた皆様にも、深く感謝申し上げます。

#### 〔注〕

- 1) 例えば、矢野桂司・中谷友樹・河角龍典・田中 覚編『京都の歴史GIS』2011, ナカニシヤ出版。
- 2) Heffernan M., “Historical Geography,” in Gregory, D., Johnston, R., Pratt, G., Watts, M.J., and Whatmore, S. eds., *The Dictionary of Human Geography (5<sup>th</sup> Edition)*, UK: Wiley-Blackwell, 2009. pp.332-335.
- 3) 特集に関わる論文は「反実仮想の地理」の研究について趣旨を説明した次の論文を端緒として、合計7編ある。Gilbert D. and Lambert D., “Counterfactual geographies: worlds that might have been,” *Journal of Historical Geography*, 36-3, 2010, pp.245-252.